



伝記と著書



マルティヌス

マルティヌスは一九〇八年八月十一日デンマーク国北ユトランドのシンドル村に生れる。赤ん坊の折母が未婚のまま死んだので叔父夫婦の家に引き取られ、育てられる。夫妻は自分の子同様に可愛がり、しつける。マルティヌスは愛情の深い子で虫けらでも殺せなく、また嘘のつけない正直者でもある。叔父叔母を父、母と呼んで仕える。いささか変わった子であるから、家の皆から一目置いた扱いを受ける。

だが叔父夫妻は貧農で、マルティヌスは牧童として家畜の世話させねばならないので、学校では必要な学科しか受けられなかった。夏は毎週三時間ずつ二日受けるのみである。冬はいくらかまじな授業であった。貧しい家に本などはなかった。わずかに絵本でおとぎの世界をのぞくにすぎない。学校ではプロテスタントの信条書が一番気に入った読み物であった。イエスは不

思議な人だと、心から愛し神に祈ることを欠かさなかった。困ったことがあるとイエスならどうされるであろうかと自問自答する。すると直ぐ解答が返ってくるというあまばい、常に危険を乗り越えた。しかし教師や牧師の言葉にいつも納得するわけではなかった。放蕩息子に教われないとの牧師の言にひっかかっていたが、「お前はてなし子だから天国に昇れないのだ」と言われた時、牧師は間違っていると断じ、全くこわいものなしの心境にいたる。

成長してからマルティヌスは製乳業を学び三十歳までいろんな工場で働く。器用で、良心的なそれでいて朗らかな人からどこでも評判が良かった。三十歳の時、コペンハーゲンの最大の製乳工場の事務室で働いていたときのことである。その頃彼は心靈知識を得たいとの強い欲求を感じていた。たまたま同じ職場の友人からいろいろ話を聞かされ、ある未知の人を紹介されて神学書の書を一冊借りてくる。ある夜その本の指示にもとづいて「神」という想念について瞑想をしたところ突然一糸の光が現われ、それが次第に貴い霊人となってマルティヌスを抱擁し、やがてマルティヌスの血肉中に深く一体化していった。わずかな間の経験で、やがて現実に戻ったが心の内になにか変わったものが残り、新しい世界に生れ替ったように、新鮮な愛の焰が燃えさかるようになる。彼は借りた本を心理的原因から終りまで読まずに返済する。これまで彼は心靈の事実につい

ては、普通人が偶然に出会う出来事聞く以外には全く無知に等しく、神についても、心の中で神に近づいたというような実感を体験したこともなかった。ほとんど無学なマルティヌスに突然神祕が訪れた。現代人の疑問とする一切の問題に因し該博な知識が高い世界からメッセージとして彼を介し送られてくる。人間の永遠性、再生、運命の法則、霊の権威、創造の偉大さなどについての知恵が、汲めどもかれない泉となって湧いてくるのである。彼はこれらのことを「生命の書」と題する膨大な著書にまとめていく。それは生涯をかけての事業であった。マルティヌスの名声は次第に拡がりついに北欧の聖者とうわさされ、共鳴者も数多くなつてゆく。彼は教団を創らず文献をもって世に訴えることを主張する。しかし世人の求めに応じて執筆の合間に毎年短期間コペンハーゲンの郊外にあるマルティヌス精神学会のセンターで講義を行った。

現代人を救うには新しい知識をもつてせねばならない、さもないと旧来の宗教から世人は離れてゆくばかりであるとの考えが彼の主流となる思想である。「生命の書」はデンマーク語で書かれたものであるが、彼の教義を信奉する人たちの協力での書から前記のようにエスベランド版が出版されたり、ここでは表示しないが一部英語、独語、スウェーデン語も出版されるにいたっている。

マルティヌスは一九八一年三月八日享年九十歳をもって静かに天寿をまっとうされた。

(訳者記す)

著書	主要著書 「生命の書」 七巻 二九二七頁
	その他小著 三〇冊 左記題名のもの
エスベラント訳	人類の運命
	復活祭
	真理とはなにか
	吾が使命の誕生をめぐって
	理想の食
	神の絵本から
	長く生きる偶像
	人類と世界像
	二つの重大世紀間で
	創られたつある国際的世界国家
	ニュース機関誌
論理	その他英、独、スウェーデン語版